

ジュニアサミットきょう開幕 代表指導の清水利宏・武庫川女子大准教授に聞く

伊勢志摩サミットに参加する7カ国の高校生らが国際問題を話し合う「ジュニアサミット」が22日、桑名市で開幕する。世界を相手にした議論の場でどんな技術が求められるのか。事前研修で日本代表の4人を指導した武庫川女子大(兵庫県西宮市)の清水利宏准教授(46)に聞いた。



あと34日

# 世界の10代と議論

## 押すだけじゃだめ

事前研修ではどんな指導をしましたか。

彼らは英語力に全く問題がなかったのですが、話す順番やいかに言うべきことに焦点を当てるか、技術的な面を徹底した。日本人は相手への配慮から上手にばかりしながら最後に結論を話すが、英語圏では最後まで聞かないと分からないのはストレスになる。

研修では、高校生が一通り話をして最後に結論が出たら「それを頭にもってきてもう一度言ってごらん」とやり直させた。話し方もちょっと目をそらしたため

に自信がなさそうに映ってしまう。そういうことがないようにした。

「主張するなら立証せよ」で、意見を言うなら事実やデータで支えるように意識させた。

—どんな姿を目指して

指導しましたか。

論理的に成立する意見をまとめ上げることと勇気を持って発言を続けることだ。過去のジュニアサミットでは、参加者の気迫に圧倒されたり、専門用語が分からなかったりして、すぐ

### ジュニアサミット

伊勢志摩サミットの関連行事として22～28日に外務省が開催。主会場はナガシマリゾートで、「次世代につなぐ地球～環境と持続可能な社会」をテーマに、7カ国から15～18歳の男女4人ずつ計28人が英語で議論する。四つの分科会での討議や視察を経て、まとめた成果文書を安倍晋三首相に提出する予定。日本代表の高校生4人は公募で選考。TOEIC785点以上などの応募資格を満たし、英語での口述審査などを経て選ばれた。

く話す人としょんぼりする人がはつきり分かれることもあったそうだ。「若者の代表として役割を期待されていることを絶対に忘れてはいけない」と伝えた。

進行役から質問を投げかけられたら、すぐに手を挙げて挙げながら考える練習もした。どんな議論でもフーストオピニオンメーカー(最初に意見を言った人)の方向性に引っ張られることが多い。質問や意見がパンパン来て大変だが、楽しい。

議論はみんなで結論を求めていく共同作業。シーンとなれば場が沈む。何がなんでも自分の意見を通す人がいるかもしれないが、議論の進行を見て欠けている視点があつたらそれを穏やかに提示して調整する役割も重要だ。

—価値観や文化が違う意見の対立もありそうですね。

本番のサミットもジュニアサミットも人類共存の幸せを目指して議論するが、それぞれの国によって幸せの定義や何を優先するかのベースも異なる。自然破壊という言葉一つとっても広大な自然がある国と少ない

国では、何ををもって「破壊」と言うのかが違うかもしれない。議題となる言葉の定義をすりあわせることが重要だ。

余計な衝突が起らないように、まずは相手の意見を認めてからコメントするよう指導した。けんかにさえならなければ、議論は大歓迎。でも、最終的にみんなが満足感を得られる結論を得るためには何かを妥協しなきゃいけない。主張したり、妥協したりしながら意見が一致するといいい。押すだけが議論じゃない。

—社会人も仕事などで議論する機会は多いですか。

一般の人にも役立つ技術はあります。拡張と集約の二つの過程を意識することが大切だ。ブレインストーミングとも言うが、まずは相手の意見を否定せずとにかくたくさんアイディアを出し合う。ある程度の山になったら折り込んでいく。それを意識するだけでも効率的な話ができると思う。